

論文

## 美的実在論の現代的論点に関する一考察

——ニック・ザングウィルの議論に焦点を当てて——

田 邊 健太郎\*

## 1. 議論の背景——美的実在論と反実在論

「モンドリアンの「ブロードウェイ・ブギウギ」は美しい」—このような美的判断を行うとき、われわれは何を行なっているのだろうか。「ブロードウェイ・ブギウギ」が、幾何学的形象の配置や色と共に「美しさ」という性質を所有している、と述べているのだろうか。それとも、「私はその絵画を見て美しく感じた」という経験を表しているのであり、絵画自体はそうした性質を持ってはいないのだろうか。

この問いに答えるために、分析美学は美的実在論と美的反実在論（以下、「実在論」、「反実在論」と略記する）という議論の枠組みを設定した<sup>1</sup>。反実在論は、美的性質が実在せず、「ブロードウェイ・ブギウギ」は「美しさ」という性質を所有しないと考える立場だ。では、美的性質を同定しているように思われる判断を行なっているとき、我々は何をしているのだろうか。この点に関して、反実在論は三つの立場に分類することができる。一つ目は「主観主義 (subjectivism)」である。われわれは美的対象ではなく美的経験について「主張 (assert)」しており、その主張は真偽を問うことが出来るとこの立場は考える。二つ目は「表出主義 (expressivism)」である。われわれは対象や経験について何かを主張するのではなく、対象と出会った結果経験される情動 (feeling) や態度 (attitude) を「表出」していると考えるのがこの立場である。三つ目は「相対主義 (relativism)」である。われわれは対象について判断し、その判断は真か偽であるが、真であるとは「あるものと相対的に真」である。つまり、ものは「それ自体で」優雅であったり不調和であるのではなく、「Xにとって」優雅であったり不調和である。

それに対して、本稿が扱う実在論とは、「美的性質が実在し、美的判断とはそれを同定することである」と考える立場である。実在論者にとって、(1)「なぜ実在論を支持するべきか」、(2)「実在論はどのように擁護しうるのか」、(3)「美的性質が実在するとしたら、それはいかなる存在論的身分であるのか」という問いが生じる。本稿では、(1)と(2)の問いに対して、現代の代表的な実在論者の一人であるニック・ザングウィル (Zangwill, Nick.) がどのように応答しているかを概観する<sup>2</sup>。とりわけ、論文『美的なもの概念<sup>3</sup>』(1998)と『美的実在論<sup>4</sup>』(2003)を中心に検討することで、ザングウィルの美的判断論と実在論とのかかわりに焦点を当てたい。日本では、実在論と反実在論の論争を扱った文献は極めて少ない。そして、仮に論じられたとしても、その視点は「美的性質」の存在論的身分に向けられており、美的判断との関わりは希薄であった<sup>5</sup>。また、国外における実在論／反実在論の論争状況も、美的「記述」に焦点を当てた論争<sup>6</sup>や、美的「性質」に焦点を当てた論争<sup>7</sup>は多く見られるものの、美的判断と実在論／反実在論の問題を統合的に扱うものは希少である。このような点を鑑みるに、ザングウィルの議論を本稿の視点からまとめることには、十分な学術的意義があると考えられる。

---

キーワード：美的実在論、美的反実在論、分析美学、美的判断

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2011年度入学 表象領域

## 2. 予備的考察——ザングウィルの美的判断論

前節で述べたように、实在論とは「美的性質が実在し、美的判断とはそれを同定することである」と考える立場である。ザングウィルは「心的行為である美的判断」<sup>8</sup>に着目して实在論を擁護する。そこで、本節では、ザングウィルの「美的判断論」を概観することによって、のちの議論への導入を図りたい。

ザングウィルは、美的判断を「評決的判断 (verdictive judgement)」と「実質的判断 (substantive judgement)」に分類しているので、順に見ていこう。

### 2. 1 評決的判断

評決的判断とは「美 (beauty) と醜 (ugliness) の判断」あるいは「美的利点と欠点 (aesthetic merit and demerit) の判断」であり、カントがいうところの「趣味判断 (judgement of taste)」である<sup>9</sup>。

評決的判断の最も美本的な特性は「主観的普遍性 (subjective universality)」である<sup>10</sup>。主観的であるとは、その判断が表象への感じられる反応 (felt response) に基づいてなされるということである。感じられる反応が認知的状態 (cognitive state) ではないのに対して、表象とは信念や知覚経験といった認知的状態を意味する。普遍性をもつとは、我々が行うべき判断とそうでない判断があり、ある判断は正しくある判断は正しくないということを意味する。

### 2. 2 実質的判断は美的判断か

実質的判断とは、「X が優雅である (X is graceful)」、 「X は情熱的である (X is passionate)」などの判断のことを言う<sup>11</sup>。ザングウィルは、現代の美学者が評決的判断のみならず実質的判断をも美的なものとして分類しているという事実を前提とする<sup>12</sup>。この事実をどのように説明しうるのか。ザングウィルは二つの説明を提示する。一つは「ネオ・カント的アプローチ」と呼ばれるものであり、もう一つは「決定説 (The Determination Account)」と呼ばれるものである。

#### 2. 2. 1 ネオ・カント的アプローチ

まずネオ・カント的アプローチから見ていこう。このケースでは、カントが美的判断に要求する基準をいかに実質的判断が満たすかが、問題となる。ザングウィルは、「ある判断がほかの判断よりも適切である」ことを要求するという普遍的妥当性に関しては、実質的判断もその基準を充たすと考える。

しかし、ザングウィルは次の点に困難を見出す。美的判断は「主観的である」つまり「感じられる反応に基づき判断される」という基準を考えた場合、実質的判断は一見したところ美的判断ではないように思われる。というのは、「あるものが優雅である」と判断するとき、あるものを優雅として知覚する知覚経験に基づき判断しているように思われるからである。ある意味で、われわれは「優雅さ」や「繊細さ」を知覚しているようにも見える。つまり、あるものを中立的に (neutral) に知覚し、その後の反応に基づき「優雅である」ことを見出すというプロセスにはなっていない。「X は優雅である」の判断は知覚経験 (表象) に基づいており、反応や情動に基づいてなされるわけではないので、カントの枠組みに従うならば、その判断は美的なものではない。

こうした予想される反論に対して、ザングウィルはスクルトンの議論を援用し、実質的判断も反応に基づく判断であり、美的判断に分類されると主張する。それは次のような論拠による。「優雅である」という概念は知覚経験の内容に入る。もしこの知覚経験が信念を形成すれば、実質的判断は信念に基づく非主観的判断ということになるだろう。しかし、「優雅である」という概念が知覚経験の内に入ることは、必ずしも概念を対象に適用し信念を形成することを意味するものではない。むしろ「優雅である」という概念が知覚経験の内容に入るとき、「X は優雅である」と想像している心的状況が形成されると考えることもできるだろう。こうした事態を、ザングウィルは「通常の知覚経験に対する想像的な知覚的反応<sup>13</sup>」と名付けている。そして、想像経験に基づく実質的判断は「あたかも～のように (as if)<sup>14</sup>」判断であり、主観的な判断に分類しうる。我々は「X を優雅であるものとして見た」結果、「X は優雅である」という判断を下しているのである。

だが、この説明は「主観的である」を「感じられる反応に基づき判断される」のみならず、「通常の知覚経験に対する想像的な知覚的反応」へと拡張している。そして、拡張された主観性概念は、「絵画的描写の判断も美的判断に含む」という好ましくない結果を招くとザングウィルは考える。したがって、ネオ・カント的アプローチではなく、異なる仕方で実質的判断が美的判断であることを説明しようと試みる。それが、決定説と呼ばれるものである。

## 2. 2. 2 決定説

決定説とは、評決的判断と実質的判断の関係性の観点から、評決的判断と実質的判断をともに美的判断というカテゴリーに属するものとして捉えようとする理論である。

二つの判断はいかなる関係にあるのか。ザングウィルは、議論の起点を評決的判断が主観的普遍性を持つことに置く。そうした性格を持つ評決的判断は、実質的判断と特別に緊密なつながりを持つ<sup>15</sup>。それはいかなるつながりであるのか。実質的判断は美あるいは醜のあり方 (ways of being) を記述する<sup>16</sup>。たとえば、「優雅さ」は「美しさ」を獲得する特定の仕方である<sup>17</sup>。これを判断の「機能」という観点から述べるならば、「評決的判断の機能は単に正の価値と負の価値 (value and disvalue) を見分けることである。それに対し、実質的判断の機能は、美的に正の価値と負の価値を決定する実質的性質を見分けることである<sup>18</sup>」。では、そのようなつながりが「特別に緊密」であるとはどういうことか。一つ目は、「あるものが特定の仕方で美しい」ことは「それが (例えば) 優雅である」ことの一部 (part) であるということであり、二つ目は、実質的な判断が評決的な判断を含意することは、つまり「あるものが優雅である」という判断が「それは美しい」を含意することは、実質的判断の意味 (meaning) の一部分であるということだ。

ここまでは、「評決的判断と実質的判断は特別に密接なつながりを持つ」ということの内実を明らかにしてきた。では、このような議論が、なぜ実質的判断を美的判断とみなすことの根拠を与えるのか。この問いに対し、ザングウィルは両判断を階層的 (hierachical) に理解することを提案する。つまり評決的判断が基礎的な (fundamental) 種類の美的判断であり、実質的判断はそれに従属するものだと考えるのである。「実質的判断の存在理由は、美的価値を決定するものを記述することであり、我々は主観的に普遍的である判断 [評決的判断のこと] によって実質的判断を理解している (apprehend)<sup>19</sup>」。こうした階層性の議論に基づき、ザングウィルは次のような結論を導く。「それゆえ、実質的判断と評決的判断の間には、緊密な概念的つながりが存在する。それは、両判断を同一のクラスに位置付けることを保証する。実質的判断が美的判断であるというための理論的根拠が存在している<sup>20</sup>」。

本節では、ザングウィルの美的判断論を概観してきた。次節では、美的判断に焦点を当ててなされる美的実在論の議論を確認する。

## 3. ザングウィルの美的実在論

本節では、ザングウィルの実在論を概観する。特に、「なぜ実在論を支持すべきであるのか」、「実在論とは、より具体的に述べるならば、どのようなものであるのか」という問いに対するザングウィルの回答に焦点を当てたい。そのために、『美的実在論1』における議論を中心に検討する。

だが、本論に入る前に、前節とのつながりで不明瞭と思われる部分を解消しておきたい。前節では、評決的判断は表象に基づくのではなく感じられる反応に基づいており、実質的判断は評決的判断と緊密なつながりを持つがゆえに美的判断とみなされる、とするザングウィルの議論を確認した。だが、後述するように、実在論は「我々は実在する美的事態等を表象する」とする立場に立つ。これは整合性を保っているのだろうか。ザングウィルの考えでは整合性を保っている。というのも、実在するものを表象することは、「信念」や「知覚経験」(前節ではこれらを総称して「表象」と名付けた) という認知的の状態も、「感じられた反応」という非認知的の状態も、ともに可能であるからだ<sup>21</sup>。

### 3. 1 なぜ美的実在論を支持すべきか

ザングウィルは、美的判断が持つ二つの規定的特性に着目する。一つ目はそれが「主観的反応に根拠づけられて

いる<sup>22</sup>』ということであり、二つ目は規範性である。そして、美的実在論を擁護する際に持ち出すのが、後者の特性である。「美的実在論は美的判断が持つ規範性<sup>23</sup>をうまく説明できるが、反実在論はそれをうまく説明することができない」ことをもって、ザングウィルは実在論支持の根拠とする。

では、「実在論は美的判断の規範性を上手く説明できる」とはどういうことだろうか。それは、実在との対応を持って、美的判断の真偽を判定できる、ということである。つまり「ブロードウェイ・ブギウギ」が「美しさ」という美的性質を持っているならば、「ブロードウェイ・ブギウギは美しい」という評決的判断は正しい判断であり、そうでないならば、それは誤った判断である。同様に、「ブロードウェイ・ブギウギ」は華やかだ」という実質的判断は、「ブロードウェイ・ブギウギ」が「華やかさ」という美的性質を持っているならば、正しい判断となり、そうでないならば誤った判断となる。反実在論は、美的性質が世界に実在することを認めないから、美的判断の正しさを世界との対応づけにより決定することはできない。そして、世界との対応づけ以外の方法から美的判断の規範性を説明することは困難である、というのが、ザングウィルの考えである<sup>24</sup>。

### 3. 2 美的実在論とは何か

では、ザングウィルが考えるところの美的実在論とはどのようなものだろうか。

ザングウィルは、まず美的快 (aesthetic pleasure) によって実在論を特徴付けようと試みる<sup>25</sup>。美的快を実在論的に理解すると、次のようになる。「[美的] 快は、特有の美的概念を行使された (deploy) 美的内容を持つ<sup>26</sup>」。

実在論的に美的快を理解することで、実在論者はカントが『判断力批判』で述べる二つの重要な対比をとらえることができる。その対比とは、美的快と「感覚的快 (sensuous pleasure)」の対比、美的快と「関心的快 (interested pleasure)」の対比である。美的快と感覚的快——たとえば、「寒い日に温かい風呂に入ることで得られる快<sup>27</sup>」——の違いは、内容<sup>28</sup>を持つかどうかという点に存する。快が内容を持つかどうかは、その快が向けられる志向の対象を持つか否かで判断することができる<sup>29</sup>。「風呂に入ることで得られる快」を例として持つような感覚的快は志向的对象を持たないので、内容をもたないとザングウィルは考える<sup>30</sup>。

他方で、美的快と関心的快——たとえば「宝くじで当選したことによる快<sup>31</sup>」や「故郷のチームが勝ったことを誇りに思う快<sup>32</sup>」——の違いは何か。ザングウィルは二点違いを上げる。一つ目は、美的快が持つ内容は美的概念を行使しているが、関心的快はそうではないということである。「故郷のチームが勝ったことを誇りに思う快」を例に考えると、その快は志向的对象として「故郷のチーム」を、志向的内容として「故郷のチームが勝った」を持つ。対して、「ブロードウェイ・ブギウギ」を経験して得られる美的快は「美 (beauty) という真正の性質 (genuine property)」を志向的对象としてもち<sup>33</sup>、「ブロードウェイ・ブギウギが美という真正の性質を持つ」が志向的内容となる。二つ目は、美における快は「欲求」の充足に基づくものではないのに対し、「関心的快」は「欲求」の充足に基づくということである<sup>34</sup>。先に挙げた「故郷のチームが勝ったことを誇りに思う快」を例にとると、「故郷のチームが勝つ」ことを欲し、その欲求が満たされるときに「関心的快」を感じる。

さて、ここまでは美的実在論を美的快の観点から特徴づけてきた。だが、「美的快は美的概念を行使する美的内容をもつ」という美的快の実在論的理解は、「実在論者が少なくとも言わなければならないことだが、実在論的アプローチに特有のものではないだろう<sup>35</sup>」とザングウィルは述べる。なぜか。それは、美的内容と美的概念についての実在論的解釈がいまだ与えられていないからである。そして、「反実在論者は実在する表象内容を仮定せずに、美的概念と美的内容を構築することができる<sup>36</sup>」からである<sup>37</sup>。したがって、「美的快は特有の美的概念を行使された美的内容を持つ」という特徴づけは、美的実在論の特徴づけとしては不十分だとザングウィルは結論づける。

そこで次に、ザングウィルは美的快ではなく、美的経験 (aesthetic experience) に目を向けて、美的実在論を特徴づけようと試みる<sup>38</sup>。美的経験を実在論的に捉えるならば、それは「美的表象内容を与えられた経験である<sup>39</sup>」。美的経験が美的事態や美的事実といった世界の側に属するものを表象すると考えるのである。このような美的経験は、美的判断を根拠づける、ないし合理的に引き起こす (ground or rationally cause)。ザングウィルは音楽を聴く経験を例に挙げている。

音楽についての実在論的な見方に従うならば、我々の音楽経験の内容は、音楽的事態 (a musical state of

affair) の表象である。これが意味することは、我々は音を特定の [美的] 性質をもつものとして表象するということだ。たとえば、音を情熱や痛切さや怒りや優雅さや美などを持つものとして表象することである。[音楽を理解するないし鑑賞するとは、] 第一に、それが現に所有している美的性質を所有するものとして、音を経験し、次にその音がそれらの性質を所有していると判断することである<sup>40</sup>

以上の議論をまとめるならば、ザングウィルによる美的実在論の特徴づけは「世界の側に美的事態 (aesthetic state of affairs) や美的事実 (aesthetic fact) などが実在し、我々はそれを美的経験において表象することである」とまとめることができる。

### 3. 3 美的反実在論への反論——隠喩的な美的記述の事例

本節の最後に、ザングウィルによる反実在論への反論の一形態を確認しよう。というのも、この反論において、ザングウィルは美的思考やそこにおいて行使される美的概念 (aesthetic concept) と美的記述の関係を明確に示しているからである。

ザングウィルが反論の対象として取り上げるのは、スクルートンによる反実在論である。

ザングウィルによれば、スクルートンの反実在論は次のような形をとる<sup>41</sup>。我々がものを美的に記述するとき、しばしば語を隠喩的に用いる。隠喩的な美的記述は、実質的判断において多く見出すことができる。音楽を聴く経験の例で言えば、音楽を「脆く、壊れやすい」ものとして、あるいは「悲しい」ものとして記述する。ところで、スクルートンの隠喩論を十分に展開したデイヴィドソンの説に従うならば<sup>42</sup>、隠喩的な言語的意味というものもは存在せず、たとえ隠喩的に用いられた時であっても、非隠喩的に用いられた時に意味することを意味する。音楽を悲しいものとして記述するとき、そのとき「悲しい」が持つ意味は、非隠喩的に用いられるときに持つ意味——すなわち、人間がもつ特定の心理的状态を意味すること——と同じである。

以上の前提から、次のように主張しよう。美的事態や美的事実、実在する美的性質を所有する対象ないし出来事の実在により成り立っていると実在論者は考える。したがって、実在する美的性質を識別する (pick out) 役割をもつ美的概念を認めねばならない。同様のことは、隠喩的に記述される美的性質についても当てはまる。その場合でも、美的性質を識別する美的概念が存在するものでなければならない。つまり、通常の文脈で使用される語と、隠喩的かつ美的な文脈で使用される語の間に意味の違いがあることを、実在論者は要求せねばならない。しかし、デイヴィドソンの隠喩論に従うならば、両者のあいだに意味の違いは存在しない。隠喩的な文脈で使用される語は非隠喩的な文脈で用いられた時にもつ意味のみをもっている。したがって、次のような困難が生じる。

美的性質を表示する語が、通常の文脈において用いられるときにもつもの同一の意味をもつ場合、われわれはいかにして美的性質を分離したクラスとして区別することができるのか<sup>43</sup>。

もし上記のスクルートンの反実在論が成り立つならば、評決的判断や隠喩を用いない実質的判断は実在する性質についてのものであるが、隠喩を用いた実質的判断はそうではないという「予期せず、また居心地のよくない二分状態<sup>44</sup>」に実在論は陥ることになる。スクルートンの反実在論に、ザングウィルはどう反論するか。

ザングウィルは、デイヴィドソンの隠喩論それ自体に対しては反論せず、それに同意すべきだと主張する。その上で、第一の反論として、次のように述べる。デイヴィドソンの隠喩論は、語の意味に関する論であるのみならず、語用論的な力 (pragmatic force) に関する論でもある。それに従うならば、隠喩は我々に何かを気づかせるという力を持つ。そして、「美的な文脈において隠喩が気づかせるもの (what a metaphor makes us notice in aesthetic context)」は実在する美的性質であり、「気づくこと」は実在的な美的内容を持つと主張する余地も、実在論者には残されている<sup>45</sup>。

次に、第二の反論である。ザングウィルは、「言語的レベルの意味の同値テーゼ (the thesis of meaning equivalence on the linguistic level)」は認めるべきだが、「思考における意味の同値テーゼ」は否定すべきだと主張する。これは以下のようなことを意味する。記述の意味は同一であっても、美的な文脈における記述と非美的な文

脈の記述が表現する思考は異なる。思考が異なるとは、二つの思考が異なる概念を用いている点に求められる。例えば、「私は悲しい」と記述する場合と「この音楽は悲しい」と記述する場合、二つの文が表現する思考は異なる。というのも、「悲しい」という語が持つ意味は同一であるが、思考において用いられている概念が異なるからである。前者が表現する思考において用いられるのは、非美的な概念「悲しい」であり、後者が表現する思考において用いられるのは美的概念「悲しい」である。そして、前者の概念が非美的性質「悲しさ」を指示するのに対し、後者の概念は音楽がもつ美的性質「悲しさ」を指示する<sup>46</sup>。

だが、語の二つの使用や、語が表現する概念を完全に分離することはできないという反論があるかもしれない。というのも、「悲しい」という語を美的に用いることの目的は、その非美的な使用に原因があるからだ<sup>47</sup>。この反論に対して、Zangwillは「美的概念を獲得することは、非美的概念を所有していることに因果的に依存するだろう<sup>48</sup>」と答える。この考え方に従うならば、「二つの概念が分離している必要はあるが、分離しすぎているわけではな<sup>49</sup>く、「語「脆い (delicacy)」の二つの使用は分離しているだろうが、完全に無関係であるわけではない<sup>50</sup>」<sup>51</sup>。

本節では、なぜ実在論を支持するべきであるのかという問いに対する回答を確認し、Zangwillが描く実在論の具体的な形を概観した。さらに、反実在論に与するスクルトンへの反論を確認することで、美的なものの隠喩的記述、思考、概念の関係を明確にした。

#### 4. 結論と今後の課題

本稿では、美的判断に着目したZangwillの実在論を考察してきた。その上で、実在論と反実在論の論争を明確化し、さらに展開させるためには、本稿の考察を次の観点から（あるいは次の観点にかかわる論争の中で）整理し、活用する必要があると思われる。第一に、美的「記述」に焦点を当てた論争である。美的記述が真正の主張 (genuine assertion) であるか、疑似的な主張 (quasi assertion) かといった観点から本稿を再検討する必要がある。第二に、美的「性質」に焦点を当てた論争である。Zangwill自身、美的性質は「感覚的反応に、非固定的に反応依存的」であると述べている<sup>52</sup>ので、本稿の内容との整合性を検討し、関連を見出すことにより、「性質」論争に本稿は寄与することが可能である。

実在論と反実在論の論争は極めて広い射程を備えている。本考察はその論争に参加する足場を築いたということができる。

#### 註

- 1 「実在論—反実在論」の捉え方は、Stecker [2010] ch.4 に多くを負っている。
- 2 (3) の問題は、Zangwill [2000] において論じられている。同論文に対する批判としては、Compton [2008/2009] を参照。
- 3 Zangwill [1998]。
- 4 Zangwill [2003a]。
- 5 このことは、数少ない文献の一つである松崎 [2011] が、Zangwillの見解に関してはもっぱら Zangwill [2000] を参照していることから明らかである。
- 6 Pettit [1983]、Todd [2004] など。
- 7 Levinson [1994] ; [2001] ; [2005]、Matravers [2005] など。
- 8 cf) .Zangwill [1998] p.86。
- 9 Zangwill [1998] p.79。
- 10 以下の叙述から明らかな通り、Zangwillは彼が解釈するところのカントの「主観的妥当性」という考えを支持し (Zangwill [2003b] p.327)、それを議論において活用している。しかし、本稿の目的はZangwill自身の美的実在論を検討することが目的であるので、Zangwillのカント解釈の是非それ自体には立ち入らないこととする。
- 11 実質的判断がいかなるものであるのかについて、Zangwillはその判断に用いられる用語 (概念) を挙げているのみである。「優雅」と「情熱的」の他には、「きゃしゃな (dainty)」、「ずんぐりむっくりした (dumpy)」、「派手な (garish)」、「繊細な、精巧な (delicate)」、「均整が取れている (balanced)」、「ぎこちない (awkward)」などが挙げられている (Zangwill [1995a] p.9; [1998] p.78)。

- 12 「美的判断の現代的カテゴリーは、たいていそのように理解されているように、評決的判断と実質的判断を両方含む」(Zangwill [1998] p.78)。
- 13 Zangwill [1998] p.82。
- 14 Zangwill [1998] p.81。
- 15 Zangwill [2010b] § 3.2。なお、評決的判断と実質的判断のつながりについて、Zangwill [1998] p.85では「ある必然的なつながり (a certain necessary link)」と述べられている。
- 16 Zangwill [2010b] § 3.2。
- 17 Zangwill [1995a] p.20。
- 18 Zangwill [1998] p.85。
- 19 Zangwill [1998] p.86。[]は引用者による補足である。
- 20 Zangwill [1998] p.86。
- 21 Zangwill [1994] p.150。
- 22 Zangwill [2003a] p.68。
- 23 規範性について、ザングウィルは「ある判断は別の判断よりも正しいという事実 (“the fact that [aesthetic] judgements can be better or worse.”) (Zangwill [2003a] p.68)、「美的規範性の原理——正しい (correct) 美的判断と態度、正しくない (incorrect) 美的判断と態度が存在する」(Zangwill [2003a] p.74)と表現している。
- 24 反実在論者として、ザングウィルはヒューム、カント、スクルートン (Scruton, R.)、ゴールドマン (Goldman, A.)、ベンダー (Bender, J.) の名前を挙げている。スクルートンへの反論は、3. 3節において取り上げる。
- 25 美的快は前節で説明した「評決的判断」の「主観性」に該当する。「趣味判断、すなわち美ないし美的利点の判断は、特殊な種類の快に基づく。すなわち美的快である」(Zangwill [2003a] pp.63-64)。
- 26 Zangwill [2003a] p.64。強調は原文。[]は引用者による挿入である。
- 27 Zangwill [2003a] p.64。
- 28 ザングウィルが述べているように (Zangwill [1995b] p.170)、ここで言われる内容とは「志向的内容」のことである。なお、「心の哲学」領域では、「志向的内容」と「表象内容」という用語は互換的に用いられている (金杉 [2007] p.93)。
- 29 成田 [2010] § 1を参照。
- 30 Zangwill [1995b] p.171。身体的感覚が志向の対象を持つか否かに関しては論争の余地がある。成田 [2010] p.5を参照。
- 31 Zangwill [2003a] p.64。
- 32 Zangwill [1995b] p.172。
- 33 Zangwill [2010b] § 1.4。
- 34 Zangwill [2010b] § 2.5。
- 35 Zangwill [2003a] p.64。強調は原文。
- 36 Zangwill [2003a] p.64。
- 37 この点に関して、ザングウィルは反実在論の戦略については詳述しておらず、「道徳哲学におけるブラックバーンの「準(疑似)実在論 (quasi-realism)」と比較せよ」とあるのみである (Zangwill [2003a] p.64)。
- 38 註 37とも関連するが、美的快に訴えて実在論を特徴づける試みから、美的経験に訴えて特徴づける試みに移行するザングウィルの議論は、不明瞭であるように思われる。というのも、美的快と美的経験の何が異なり、それらはどのような関係にあるかが明らかにされていないからだ。なお、Zangwill [2009]では「美的経験が、[ある判断がある判断よりも正しいという特性を持つ]判断を根拠づけるという事実は、美的経験であるということ、あるいは美しいものにおける快であることにとって本質的である」(p.17)と述べられており、美的経験と美的快が美的判断に対して同等の役割を果たすと考えるザングウィルの思考を見て取ることができるものの、両者の違いについては触れられていない。
- 39 Zangwill [2003a] p.64。強調は原文。
- 40 Zangwill [2003a] pp.64-65。強調は原文であり、[]は引用者による補足である。
- 41 以下に示すスクルートンの反実在論の議論のまとめは、Zangwill [2001b] pp.166-168に負う。
- 42 3. 3節は、Zangwill [2001b]における議論を中心に構成されている。そこで批判の対象となっているスクルートンの議論は、Scruton [1974]において見出されるものである。Scruton [1974]とデイヴィドソンの隠喩論の関係について、ザングウィルは次のように述べている。「スクルートンが主張する隠喩についての一般的理論は、デイヴィドソンが[スクルートン [1974]より]数年のちに、論文「隠喩が意味するもの」で十分に展開したものである」(Zangwill [2001b] p.167)。なお、ザングウィルの解釈 (Zangwill [2010a] pp.96-97)に従うならば、Scruton [1997]において採用されるようになった隠喩論は、デイヴィドソンのものより制限されている。そこにおいて、スクルートンは「隠喩の目的 (point) は対象を記述することではなく、そのアスペクトを変化させることであり、その結果我々が対象

に対して異なる仕方では反応する」(Scruton [1997] p.84) と述べている。

43 Scruton [1974] p.44。

44 Zangwill [2001b] p.168。

45 「隠喩が気づかせるものは非命題的である」というデイヴィドソンの主張に対して、ザングウィルは「冗談や夢や隠喩は、絵とか頭にかんがうとくらったりすることと同じように、ある事実を我々にはっきりと気づかせることはできる」というデイヴィドソン自身の記述を根拠として、美的事実も隠喩によって気づくものであり、美学は隠喩において気づくものが命題的である例外的なケースの一つであるという見解を述べている (Zangwill [2001b] p.171。デイヴィドソンの引用は Davidson [1984] p.263 (邦訳 289 頁) からのものであり、邦訳を参照した)。

46 近年の論考において、ザングウィルは次のように表現している。「實在論者にとって、音楽についての我々の経験、思考、判断は美的表象内容を持つ。[...] 我々の経験、思考、判断は構造化されている。美的概念は、それらの本質的要素であり、音楽がもつ美的性質を指示する」(Zangwill [2011] p.4)。

47 このことをバッドは次のように表現している。「[美的な文脈において] 語「悲しい」を用いる目的は、まさに、音楽と悲しさのつながりを示すあるいは表現することである。それは、音楽を悲しさと関係付けることにほかならない」(Budd [2005] p.117、[ ] は引用者による補足である)。

48 Zangwill [2001b] p.169。

49 Zangwill [2001b] p.169。

50 Zangwill [2001b] p.170。

51 「美的概念の獲得が非美的概念の所有に因果的に依存する」というザングウィルの説に対する批判としては、Budd [2005] pp.116-117 を参照。スクルトンの反實在論に対するザングウィルの反論に対しては、Budd [2005] 以外に、Cooke [2007]、Jonker [2009] による批判がある。ザングウィルの反論が成功しているか否かの検討は、別稿に譲りたい。

52 Schellekens [2012] p.96, fn.20。

## 【引用文献】

金杉武司 [2007]. 『心の哲学入門』、勁草書房。

松崎俊之 [2011]. 「美的特性に関する傾性理論——その美的特性實在論としての可能性を探る」、『石巻専修大学紀要』、22 巻、109-123 頁。

成田和信 [2010]. 「快さと楽しさ」、『人文科学』、25 巻、1-29 頁。

Budd, M. [2005]. 'Aesthetic Realism and Emotional Qualities of Music'. *British Journal of Aesthetics*, 45-2: 111-122.

Compton, E. [2008/2009]. 'Varieties of Response-Dependence: A Critique of Zangwill'. *American Society for Aesthetics Graduate E-Journal*, 1-1:1-7.

Cooke, B. [2007]. 'Imagining Art', *British Journal of Aesthetics*, 47-1: 29-45.

Davidson, D. [1984]. 'What Metaphors Mean'. in his *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Clarendon Press. (=野本・植木・金子・高橋訳、『真理と解釈』、勁草書房、1991 年)

Jonker, J. [2009]. 'Aesthetic Realism and Metaphor'. *Postgraduate Journal of Aesthetics*, 6-2: 32-41.

Levinson, J. [1994]. 'Being Realistic About Aesthetic Properties'. *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 52-3: 351-354.

Levinson, J. [2001]. 'Aesthetic Properties, Evaluative Force, and Differences of Sensibility'. in Brady, E. and Levinson, J. (eds.) *Aesthetic Concepts: Essays after Sibley*, Oxford: Clarendon Press.

Levinson, J. [2005]. 'Aesthetic Properties'. *Aristotelian Society Supplementary Volume* 79: 211-227.

Matravers, D. [2005]. 'Aesthetic Properties'. *Aristotelian Society Supplementary Volume* 79: 191-210.

Pettit, P. [1983]. 'The Possibility of Aesthetic Realism'. in Schaper, E. (ed.) *Pleasure, Preference, and Value*, Cambridge University Press.

Schellekens, E. [2012]. 'Aesthetic Property'. in Ribeiro, A. C. (ed.) *Continuum Companion to Aesthetics*, Continuum.

Scruton, R. [1974]. *Art and Imagination*, London: Methuen.

Scruton, R. [1997]. *The Aesthetics of Music*, Oxford University Press.

Stecker, R. [2010]. *Aesthetics and the Philosophy of Art: An Introduction* 2<sup>nd</sup> Edition, Rowman & Littlefield Pub Inc.

Todd, C. [2004]. 'Quasi-Realism, Acquaintance, and the Normative Claims of Aesthetic Judgement', *British Journal of Aesthetics*, 44-3: 277-96.

Zangwill, N. [1990]. 'Two Dogmas of Kantian Aesthetics'. in Woodfield, R. (ed.) *Proceedings of the 11th International Congress in*

- Aesthetics 1988: Selected Papers*. (<http://www.dur.ac.uk/nick.zangwill/PDFs/TwoDogmasKantianAesthetics.PDF>)
- Zangwill, N. [1994]. 'Hume, Taste and Teleology'. in Zangwill [2001a].
- Zangwill, N. [1995a]. 'The Beautiful, the Dainty and the Dumpy'. in Zangwill [2001a].
- Zangwill, N. [1995b]. 'Kant on Pleasure in the Agreeable'. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 53-2: 167-176.
- Zangwill, N. [1998]. 'The Concept of the Aesthetic'. *European Journal of Philosophy* 6 -1: 78-93.
- Zangwill, N. [2000]. 'Skin Deep or In the Eye of the Beholder?'. *Philosophy and Phenomenological Research* 61-3: 595 - 618.
- Zangwill, N. [2001a]. *The Metaphysics of Beauty*, Cornell University Press.
- Zangwill, N. [2001b]. 'Metaphor and Realism in Aesthetics'. in Zangwill [2001a].
- Zangwill, N. [2003a]. 'Aesthetic Realism 1'. in Levinson, J. (ed.) *The Oxford Handbook of Aesthetics*, Oxford University Press.
- Zangwill, N. [2003b]. 'Beauty'. in Levinson, J. (ed.) *The Oxford Handbook of Aesthetics*, Oxford University Press.
- Zangwill, N. [2007]. *Aesthetic Creation*, Oxford University Press.
- Zangwill, N. [2009]. 'Aesthetic Experience'. in Bayne, T., Cleeremans, A. and Wilken, P. (eds.) *Oxford Companion to Consciousness*, Oxford University Press.
- Zangwill, N. [2010a]. 'Scruton's Musical Experiences'. *Philosophy* 85 -1: 91-104.
- Zangwill, N. [2010b]. 'Aesthetic Judgement'. in Zalta, E. (ed.) *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. (July 2010 edition) (<http://plato.stanford.edu/entries/aesthetic-judgment/>)
- Zangwill, N. [2011]. 'Music, Essential Metaphor, and Private Language'. *American Philosophical Quarterly* 48-1: 1-16.

## Considerations on Contemporary Aesthetic Realism: Nick Zangwill on Aesthetic Judgment

TANABE Kentaro

Abstract:

In a series of papers, Nick Zangwill has argued for aesthetic realism. His point of argument is that aesthetic anti-realism cannot grasp the normativity of aesthetic judgment. In this paper, I summarize and examine Zangwill's aesthetic realism in terms of his theory of aesthetic judgment. In section 1, I locate Zangwill's position in contemporary aesthetic realism/anti-realism debates. In section 2, I summarize Zangwill's theory of aesthetic judgment, which divides aesthetic judgment into two sorts, verdictive judgment and substantive judgment. In particular, I focus on the Zangwill's argument which supports substantive judgment as aesthetic judgment. In section 3, I examine Zangwill's aesthetic realism. First, I examine why Zangwill argued for aesthetic realism and, then, exactly what it is that Zangwill called "aesthetic realism." In conclusion, I suggest that we should combine Zangwill's argument with the issue of aesthetic property and the issue of aesthetic description in order to solve the problem of aesthetic realism.

Keywords: aesthetic realism/aesthetic anti-realism, analytic aesthetics, aesthetic judgment

### 美的実在論の現代的論点に関する一考察 ——ニック・ザングウィルの議論に焦点を当てて——

田 邊 健太郎

要旨：

本稿は、現代イギリスの哲学者ニック・ザングウィルの美的実在論をめぐる一連の考察を手がかりにして、美的実在論の現代的論点を明らかにすることを目的とした論文である。美的実在論は「美的記述」に着目する議論や「美的性質」に着目する議論が存在しており、その議論の形態は必ずしも一致しているわけではない。本稿では、「美的判断」に焦点を当てたザングウィルの議論が主題的に扱われる。第1章では、現代の美的実在論と反実在論の様相を簡潔に示し、ザングウィルの議論がどのような位置を占めるかを確認する。第2章では、カントの「主観的普遍性」を中心に展開されるザングウィルの美的判断論を概観することで、次章への導入を図る。第3章では、ザングウィルが美的実在論を支持する動機を確認するとともに、美的実在論が具体的にいかなる形で論じられているのかを明らかにする。